Japanese Association of Educational Psychology

42　教育心理学研究, 2000, 48, 42—51

特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響

―― 課題成績のフィードバックの操作を用いて ――

三　宅　幹　子[1]

本研究では，特性的自己効力感（GSE）が課題固有の自己効力感（SSE）の変容に及ぼす影響を検討した。実験1では，72名の大学生をGSE尺度得点によってGSE高群とGSE低群とに分けた。さらに各群をポジティブFB条件，ネガティブFB条件，FBなし条件（統制条件）の3つの条件に割り当てた。ポジティブFB条件とネガティブFB条件では，それぞれポジティブまたはネガティブに操作されたフィードバックが与えられた。SSEの評定には3種の測度（予測される課題遂行量に基づき絶対的に評定されるSSE-A，予測される偏差値に基づき相対的に評定されるSSE-R，総合的に評定されるSSE-T）を使用したが，GSE群間に差が見られたのは，SSE-Aにおいてのみであった。SSE-Aの値は，ネガティブFB条件下でGSE高群の方がGSE低群よりも有意に高かった。他の2つのFB条件下ではGSE高群とGSE低群との間に有意な差はなかった。SSE-T，SSE-Rでは，いずれのFB条件下でも，GSE群間に有意な差はなかった。実験2では，40名の大学生をGSE高群とGSE低群とに分け，さらに各群をネガティブFB条件，FBなし条件に割り当てた。やはり，ネガティブFB条件下でのみ，GSE高群の方がGSE低群よりもSSE-Aの値が高かった。SSE-T，SSE-Rでは，いずれのFB条件下でも，GSE群間に有意な差はなかった。さらに，課題遂行量にも，ネガティブFB条件下でGSE高群の課題遂行量がGSE低群よりも多くなるという，SSE-Aと同様の変容パターンの傾向が見られた。これらの結果から，GSEの高さがSSE-Aの変容を通じて課題遂行に影響している可能性が示唆された。

キーワード：特性的自己効力感，課題固有の自己効力感，フィードバック

問　　題

自己効力感（self-efficacy）とは，ある状況において，ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期であり（Bandura, 1977），社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念の1つである。ある課題に対する自己効力感を自分がどの程度持っているか（perceived self-efficacy）が，その個人の行動の変容を予測することが指摘されており（坂野, 1989；坂野・東條, 1986），実際の遂行を規定する先行要因の1つであると考えられている。そしてこのような自己効力感の課題遂行予測機能が重視された結果（中澤・大野木・伊藤・坂野・鎌原, 1988），特に自己効力感の上昇をもたらす介入方法について，これまで多くの研究がなされてきた。しかしそれらの自己効力感の向上のための介入が，性格特性や認知傾向などの個人の内的要因とどのように関連して，自己効力感が変容していくのかについて検討している研究はまだ十分ではなく，自己効力感を操作する介入方策の臨床的意義と効用については今後さらに詳しく検討する余地が残されている（中澤他, 1988）。

ところで，自己効力感には2つの水準があることが知られている（Bandura, 1977；坂野・東條, 1993）。1つは臨床・教育場面における研究でよく取り上げられている，課題や場面に特異的に影響を及ぼす自己効力感であり（task-specific self-efficacy：以下SSEとする），もう1つは具体的な個々の課題や状況に依存せずに，より長期的に，より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である（generalized self-efficacy：以下GSEとする）。後者は，ある種の人格特性的な認知傾向とみなすことができることから，特性的自己効力感と呼ばれることもある（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995）。Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs & Rogers（1982）は，GSEが過去の成功と失敗の経験から形成され，個人差が存在すること，そして特定の状況だけでなく未経験の新しい状況においても適応的に処理できるという期待に影響を与えることを示唆した。GSEに個人差が想定されるということは，SSEを高く認知したり低く認知したりする傾向は個人によって異なり，GSEの高・低が個人の行動全般にわたって影響する可能性があることを示す（成田他,

[1] 広島大学大学院教育学研究科

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

1995)。

GSE と SSE との間の関連については，GSE が SSE の情報源となる(Watt & Martin, 1994)，或いは，“特定の行動遂行場面では，当該の行動に対する task-specific な self-efficacy の高さが重要な要因になっていることは明らかであるが，それには，その個人のより一般的な self-efficacy のレベルが大きな影響をもたらしていると思われる”(坂野・東條, 1986, p.80) など，GSE が SSE に影響を与えていることを示唆する指摘がある。また，行動予測という観点から，坂野・東條 (1986) は，SSE と GSE はそれぞれ短期的・長期的に行動に影響を及ぼしており，両者を考慮することで臨床場面での行動予測の精度はあがると指摘している。

GSE と SSE と行動予測機能についての上記のような指摘を考え合わせると，GSE は SSE の情報源として SSE の変容に影響を与え，SSE の変容は課題遂行量に影響する，という一連の流れが想定できる。もしそうであるとすれば，SSE の向上のための介入を行う上で，GSE が SSE にどのように影響を与えているのかを解明することは重要な意味を持つ。しかし，GSE と SSE の間の関連について実証的に検討した研究はまだ少数である上に，それらの研究は，両者の相関関係の検討にとどまっており (e.g., Watt & Martin, 1994)，影響過程について実証的に検討したものは見あたらない。GSE が SSE に及ぼす影響を検討するには，SSE の変容過程で GSE がどのように影響するかを検討することが必須であろう。GSE が SSE に与える影響を検討することは，坂野・東條 (1986) が指摘している上記のような観点から考えて，よりよい行動予測を可能にするために必要である。また，それに加えて，訓練前の態度や予期における個人差は訓練効果を規定する重要な問題であるにもかかわらず，それらについての実証的研究は少ない (Tannenbaum, Mathieu, Salas & Cannon-Bowers, 1991) など，介入の効果を規定する個人的要因の検討が十分でないことへの批判に答えることにもなると考えられる。

ところで，SSE を変容させる操作方法の 1 つに，課題遂行場面における課題遂行成績の自我関与的な (ego involvement ; Nicholls, 1984) フィードバックがある。これは課題成績のフィードバック (以下 FB とする) として，偏差値のような，他者との比較において自己の能力を推定する情報を用いる方法である。Bandura(1995) や Bandura & Jourden (1991) は，自己効力感が社会的な比較によって強く影響を受けることを指摘しており，また，この自我関与的 FB によって SSE の変容が見られることが実際に確かめられている (e.g., 深田, 1986)。そこで，本研究ではこのような FB の操作を用いて SSE を変容させ，その過程で，FB 操作が SSE に与える影響が GSE の高・低により異なるか否か，との視点から，GSE が SSE の変容にどのように影響を及ぼすのかを検討する。GSE が SSE に影響を与えているのならば，GSE の高・低により，FB の影響は異なると考えられる。さらに，上記の先行研究からの知見に加えて，自己効力感の高さは，努力量や困難に直面した際の耐性を通して課題遂行に影響すると考えられていることから (Bandura, 1977)，GSE の高・低の差も，一種の困難場面であるネガティブな FB 条件下でより顕著になり，GSE が高いほど SSE におけるダメージは小さいのではないかと予想される。

さて，SSE については，本研究で使用する自我関与的 FB のような，他者との比較が用いられる状況下では，personal self-efficacy と competitive self-efficacy の 2 つが存在するという指摘がある (Taylor, 1989)。personal self-efficacy とは，内的なパフォーマンスの基準に基づくものであり(e.g., マラソンのタイム)，competitive self-efficacy とは，競争などの外的なパフォーマンスの基準に基づくものである (e.g., ライバルに勝つかどうか)。自我関与的 FB による FB 操作を用いた研究では (e.g., Watt & Martin, 1994)，例えば，「何パーセントの生徒が自分よりも速く課題を完了させると思いますか」などの相対的な評定を求める測定方法が用いられることがあるのに対して，行動療法的アプローチ (e.g., Bandura, Reese & Adams, 1982) や治療教育研究 (e.g., Schunk, 1983) など，課題関与的状況下での研究では，例えば，「いくつできると思いますか」といった絶対的な評定を求める測定方法が多く使用されている。これらは，どのようなパフォーマンスの基準に照らして評定を求めるかが異なっており，実質的には，上記の competitive self-efficacy と personal self-efficacy にそれぞれほぼ対応するものを対象にしていると考えられる。また，「どのくらいできると思いますか」といった総合的な評定を求める測定方法を用いている研究もある (e.g., 深田, 1986)。

SSE がパフォーマンスのどの側面に焦点を当てて評定されているかの違いにより，自我関与的 FB や GSE の影響は異なってくる可能性がある。そこで本研究では，このような自己効力感概念に基づいて，総合的な評定，絶対的な評定，相対的な評定の 3 種の評定方法を用いて SSE の測定を行い，3 者間で自我関与的 FB (以下，特に記述のない場合，FB は自我関与的 FB を指すも

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

のとする）とGSEの影響が異なるかどうかについても検討することとする。

実験 1

目的

課題遂行場面において，課題遂行成績のFBの操作を行い，FBがSSEに与える影響はGSEの高・低により異なるか否か，との視点から，GSEがSSEの変容に及ぼす影響を検討する。特に，FBがネガティブな場合，GSEが高いほどネガティブな影響は少ないことが予想されるが，このような違いがみられるかどうかに焦点を当てて検討する。また，GSEによりSSEの変容傾向に違いがみられた場合，そのSSEの変容傾向の違いが課題遂行にも影響を及ぼすと考えられるので，この点についても併せて検討する。

方法

被験者 事前に，地方小都市の国立H大学の教職科目および心理学講義の受講学生約500名を対象に，特性的自己効力感尺度（成田他, 1995；以下GSE尺度とする）を集団で実施し，尺度実施後に実験の参加者を募った。実験への参加が得られた102名を，回答に不備の無かった全被調査者（476名）のGSE尺度得点の平均値（70.30）に基づき，GSE高群（52名）と低群（50名）とに分け，さらに各群をそれぞれ約3分の1ずつ，ポジティブFB条件，ネガティブFB条件，FBなし条件の3つのFB条件に割り当てた。その際，なるべく性別が偏らないように配慮した。この102名を対象に後述の手続きによって実験を行ったが，このうち12名は手続きに述べるような理由で除かれたので，最終的に分析可能なデータが得られたのは90名（男性30名，女性60名，年齢は18-26歳，平均年齢は20.3歳）であった。

手続き 個別に実験を行った。実験手順は，以下の通りである。

課題の説明と練習試行を行った後，課題遂行前のSSE（以下，プレSSEとする）の測定を行った。その後，課題遂行（1分30秒間），遂行成績のFB（操作），自己評価の測定，次の試行についてのSSEの測定，を1セットとし，これを4回繰り返した。

実験終了後，被験者に真の実験目的とFBの操作について説明し，実験全般についての了承を得た。さらに，実験目的やFBの操作に気づいていたかどうかを尋ね，気づいていた被験者やデータに不備のあった被験者（12名）は結果の分析から除外した。被験者1人当たりの所要時間は，15分から20分であった。

実験材料 誤表記検出課題を用いた。これは，漢字仮名混じりの文章を読み，その中に含まれる漢字の誤表記を見つけだす課題である。制限時間（1分30秒間）内にできるだけたくさんの誤表記を検出するように教示した。

課題は，Carson（1955 上遠訳, 1987）の「海辺一生命のふるさと一」から抽出した説明的文章をもとに，実験者（著者）が漢字部分の表記を，一部，誤表記に書き換えて作成したものである。誤表記に書き換えた部分について，実験者を含まないH大学大学院生3名に，誤表記といえるかどうかを評定させ，全員一致して誤表記と判断されたもののみを用いた。その結果採用された誤表記は，被験者にとって，注意して読めば誤表記と判断できるものであったと考えられる。すなわち，この課題は特殊能力を必要とするものではなく，遂行量は努力次第で変化し，努力量を反映するといえよう。このようにして1試行あたり6パラグラフ，計24パラグラフの課題を作成した。1試行あたりの量は，1分30秒間の制限時間内に読み切ってしまうことのできない量であった。課題は1パラグラフずつA4の用紙に印刷したものを冊子状に綴じて被験者に提示した。その際，終末努力のようなバイアスをさけるため，計4回の各試行の終わり部分と，冊子の終わり部分にフィラーページを挿入した。

遂行成績のFBの操作（FB操作） ポジティブFB条件，ネガティブFB条件，FBなし条件（統制条件）の3条件を設定した。ポジティブFB条件とネガティブFB条件では，課題遂行後に「課題の遂行成績をお知らせします」と告げて，課題の遂行量（正しく検出できた誤表記の数）を集計した。そしてその場で課題の遂行量をコンピュータに入力し，以下の①から③のFB情報をモニタ画面上に提示した。①被験者の課題遂行量，②被験者の課題遂行量の偏差値（「前年度の実験のデータに照らし合わせて算出した」との名目で，ポジティブFB条件では65から55の数値，ネガティブFB条件では45から35の数値を，ランダムに提示した），③前年度の実験でのH大学の学生の平均遂行量。①は被験者の実際の課題遂行量であり，②と③は，実験操作を加えたFB情報である。この平均遂行量（③）は，①と②を以下の式に代入して算出した：平均遂行量（③）＝実際の課題遂行量（①）×｛1－（偏差値（②）－50）／25｝。③の値は，偏差値（②）の数値に応じて，ポジティブFB条件では実際の課題遂行量（①）よりも低くなり，ネガティブFB条件では実際の課題遂行量（①）よりも高くなるようにしてある。なお，これらは，「この課題でのあなたの成績は，（①）でした。H大学生を被験者とした実験結果におけるあなたの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1　SSE 測定項目と評定方法

SSE-T	：「次の問題はどの程度うまくできると思いますか」
評定方法	：「10．非常にうまくできる」から「0．全然うまくできない」の選択肢の中から1つを選択する．
SSE-R	：「H大学の学生を対象とした，前回の実験の成績と比較したとき，次の問題における，あなたの相対的な位置は，どのあたりだと思いますか．偏差値で評定してください」
評定方法	：「70以上」から「30以下」のうち最も当てはまる数字に○をつける． 70・・・65・・・60・・・55・・・50・・・45・・・40・・・35・・・30 以上 程度 程度 程度 程度 程度 程度 程度 以下
SSE-A	：「次の問題では，前回と同じ時間内にいくつの誤表記を見つけることができると思いますか」
評定方法	：「1.5個以下」，「2.6個～8個」，「3.9個～11個」，以下，同じ間隔で続く「10．30個以上」までの10段階の選択肢の中から1つを選択する．

成績の偏差値は（②）です。全体の平均正答数は（③）でした。」という文章の形で提示し，第1回のFBの際に，画面の見方を説明し，FB情報を理解していることを確認した。FBなし条件ではFB情報は与えず，課題遂行後，すぐに自己評価の測定を行った。

自己評価の測定　「さっきの問題についておたずねします。さっきの問題はどの程度うまくできたと思いますか」との質問項目により，課題遂行についての自己評価をさせた。評価は「10.非常にうまくできた」から「0.全然うまくできなかった」までの11段階評定であった。これはFB操作の有効性のチェックのための項目である。

SSEの測定　SSEの測定には，総合的な(total)評定を求めるSSE-T項目，相対的な(relative)評定を求めるSSE-R項目，絶対的な(absolute)評定を求めるSSE-A項目，の3項目を使用した。測定項目と評定方法をTABLE 1に示す。

結果と考察

1．GSEとプレSSEとの関連，プレSSEと課題遂行量との関連

以下では，GSE尺度得点，SSEや自己評価の評定値を便宜的に間隔尺度上の得点とみなして処理する。SSE評定値については，SSE-Tは0から10の11段階の評定値，SSE-Aは1から10の10段階の評定値を分析に使用した。また，SSE-Rは偏差値の「30以下」を1，「35程度」を2，「40程度」を3，というように，「30以下」から「70以上」までのそれぞれの選択肢に，1から9までの数値を順に与え，これを評定値として分析に使用した。なお，SSE-A，SSE-Rのいずれの尺度においても，両極端の選択肢が選択されることは皆無に近く，従って，「以上」，「以下」という表記を含むことが，間隔尺度とみなしたとき，著しく不都合をもたらすことはないと考えられる。

GSE尺度得点と3種のプレSSE評定値との間，3種のプレSSE評定値と第1試行の課題遂行量との間のピアソンの相関係数を算出した（$N=90$）。GSE尺度得点とプレSSE-T，プレSSE-R，プレSSE-Aの各々との間の相関係数は，それぞれ$r=.207(p<.10)$，$r=.176(p<.10)$，$r=.094(ns)$で，強い相関はみられなかった。また，プレSSE-T，プレSSE-R，プレSSE-Aの各々と第1試行の課題遂行量との間には正の相関がみられ，理論どおり，SSEが高いほど課題遂行量が多い傾向がみられた（それぞれ，$r=.282, p<.01$；$r=.284, p<.01$；$r=.322, p<.01$）。

2．FB操作がSSEの変容に与える影響におけるGSEの効果

群構成　90名の分析可能なデータから，GSE尺度得点の平均値付近の被験者を除外するため，各FB条件群よりGSE尺度得点の両極から12名ずつを抽出し，GSE (2)×FB条件 (3) の6群を構成した（1群12名）。GSE高群のGSE尺度得点の平均値（標準偏差）はポジティブFB群，ネガティブFB群，FBなし群の順に，81.4(6.0)，82.6(6.3)，80.4(4.4)であり，GSE低群では同様に60.5(6.2)，55.4(8.7)，58.8(5.2)であった。GSE尺度得点についてのGSE (2)×FB条件 (3) の2要因の分散分析の結果，GSEの主効果のみが有意であったので（有意水準は5%）（$F(1,66)=226.69, p<.001$），群構成はほぼ適切であったと考えられる。

FB操作の有効性の確認　FB操作の有効性を確認するために，自己評価の評定値について，FB条件(3)×測定回(4)の2要因の分散分析を行った。その結果，FBの主効果のみが有意で（$F(2,207)=4.66\ p<.05$），各群の平均値は，ポジティブFB条件（$M=5.82$），FBなし条件（$M=4.77$），ネガティブFB条件（$M=4.25$）の順に下がり，ライアン法を用いた多重比較の結果，ポジティブFB条件とネガティブFB条件の間には有意差が見られた。これよりFB操作は成功していたと考えられる。

FB操作がSSEの変容に与える影響におけるGSEの効果　SSE-T，SSE-R，SSE-Aのそれぞれのプレ測定値と第1回から第4回の測定値について，各群の平均値と標準偏差を求めた（TABLE 2）。

SSE-T，SSE-R，SSE-Aそれぞれについて，FBの影響を受けていないプレSSE測定値を共変量とする，GSE (2)×FB条件 (3)×測定回 (4) の3要因共分散分析

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 条件群別，測定回別にみたSSE-T，SSE-R，SSE-A，課題遂行量の平均値(( )内は標準偏差，各群12名)（実験1）

		GSE高			GSE低		
		FBなし	ポジティブFB	ネガティブFB	FBなし	ポジティブFB	ネガティブFB
SSE-T	プレ測定	5.33(1.84)	4.92(1.80)	5.67(1.84)	4.50(1.44)	5.33(1.43)	4.42(1.98)
	第1回測定	5.50(1.80)	5.67(1.80)	4.83(1.07)	4.58(1.75)	5.67(1.37)	4.25(2.31)
	第2回測定	5.42(2.18)	5.92(1.98)	4.75(0.83)	4.58(1.80)	5.75(1.69)	4.17(2.44)
	第3回測定	5.67(1.80)	6.25(1.64)	4.33(1.03)	4.58(1.85)	5.92(1.55)	4.00(2.24)
	第4回測定	5.33(1.89)	6.08(1.66)	4.33(0.94)	4.33(1.75)	6.00(1.53)	4.00(2.31)
	第1～4回の平均	5.48(1.93)	5.98(1.79)	4.56(1.00)	4.52(1.79)	5.83(1.55)	4.10(2.33)
SSE-R	プレ測定	5.00(1.29)	4.92(1.19)	5.00(1.35)	4.17(1.28)	4.92(1.19)	4.25(1.36)
	第1回測定	5.08(1.04)	5.92(1.04)	3.75(0.60)	4.08(1.32)	5.83(1.28)	3.42(1.19)
	第2回測定	5.08(1.19)	6.42(0.95)	3.67(0.85)	4.33(1.31)	6.00(1.35)	3.33(1.18)
	第3回測定	5.25(1.01)	6.67(0.85)	3.42(0.49)	4.25(1.48)	6.17(1.28)	3.17(1.21)
	第4回測定	5.08(1.61)	6.42(0.86)	3.33(0.62)	4.25(1.48)	6.17(1.28)	3.17(1.21)
	第1～4回の平均	5.13(1.24)	6.35(0.97)	3.54(0.68)	4.23(1.40)	6.04(1.31)	3.27(1.20)
SSE-A	プレ測定	4.08(1.32)	3.58(1.38)	3.75(0.83)	3.83(1.68)	3.67(1.25)	3.25(1.09)
	第1回測定	4.08(1.32)	5.25(2.01)	4.83(1.62)	3.83(1.28)	4.33(1.60)	3.58(0.86)
	第2回測定	4.25(1.23)	5.17(1.77)	5.08(1.19)	3.92(1.04)	4.75(1.69)	3.67(0.85)
	第3回測定	4.00(1.22)	5.50(1.76)	5.92(1.11)	3.83(1.14)	5.25(1.69)	3.83(0.90)
	第4回測定	4.25(1.01)	5.58(1.71)	5.83(1.34)	4.08(1.44)	5.17(1.57)	4.08(1.11)
	第1～4回の平均	4.15(1.21)	5.38(1.82)	5.42(1.41)	3.92(1.24)	4.88(1.68)	3.79(0.96)
SSE-A	第1試行	13.42(4.01)	17.58(3.66)	15.17(3.53)	14.75(3.96)	14.75(3.72)	12.75(4.40)
	第2試行	13.83(4.45)	16.08(2.60)	16.92(3.04)	15.75(3.79)	17.42(4.09)	14.17(4.12)
	第3試行	16.00(4.32)	20.50(3.91)	20.00(2.92)	17.83(4.41)	19.42(3.95)	16.25(5.04)
	第4試行	16.67(3.12)	20.08(4.33)	18.33(4.73)	18.58(3.86)	19.08(4.07)	16.50(4.68)
	第2～4試行の平均	15.50(4.19)	18.89(4.19)	18.42(3.87)	17.39(4.21)	18.64(4.13)	15.64(4.74)

注．SSE-Tの得点範囲：0点から10点，SSE-Rの得点範囲：1点から9点，SSE-Aの得点範囲：1点から10点

を行った。なお，GSE群間でプレSSE測定値の平均値の差を検定（t検定）したところ，プレSSE-RにのみGSE高群の方が低群より高い傾向がみられたが，SSE-T，SSE-Aのプレ測定値には差は見られなかった。

(1) SSE-TとSSE-Rについての共分散分析では，いずれもFB条件の主効果（SSE-T：$F(2,65)=8.95$, $p<.001$；SSE-R：$F(2,65)=54.45$, $p<.001$）とFB条件×測定回の交互作用のみが有意であり（SSE-T：$F(6,195)=3.26$, $p<.01$；SSE-R：$F(6,195)=3.83$, $p<.01$），GSEにより変容の仕方に違いはみられなかった。すなわちGSEの高・低にかかわらず，ポジティブFB条件では上昇，ネガティブFB条件では下降，FBなし条件では変化はみられないという，先行研究（e.g., 深田, 1986）に示されているFB操作の効果とほぼ同様の結果が得られた。

(2) SSE-Aについての共分散分析の結果，GSEの主効果（$F(1,65)=7.68$, $p<.01$），FB条件の主効果（$F(2,65)=12.75$, $p<.001$），測定回の主効果（$F(3,195)=13.47$, $p<.001$），FB条件×測定回の交互作用（$F(6,195)=2.79$, $p<.05$），GSE×FB条件×測定回の二次の交互作用（$F(6,195)=2.43$, $p<.05$）が有意であった。SSE-A測定値の共変量による調整済み平均値の変化を示すとFIGURE 1のようになる。

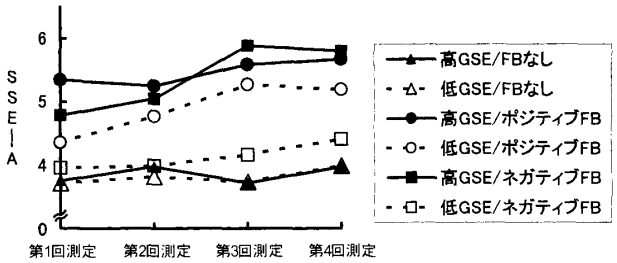

FIGURE 1 SSE-Aの平均値の変化（実験1）（プレSSE-Aによる調整済み平均値）

二次の交互作用についてFB条件別にGSE×測定回の単純交互作用を検定したところ，ネガティブFB条件でのみ有意であった（$F(3,198)=3.16$, $p<.05$）。すなわち，ネガティブFB条件では，GSE高群では測定につれ上昇するのに対し，低群では低いままで，測定につれ群間差が広がっていた（ただし群間差は第1回の測定から有意である）。一方，ポジティブFB条件とFBなし条件ではGSE群間に変容の仕方の違いはみられなかった。

また，GSE群別にFB条件×測定回の単純交互作用を検定したところ，GSE高群においてのみ有意であった（$F(6,198)=3.60$, $p<.01$）。すなわち，GSE高群ではFB条件によって，変容傾向が異なっており，ポジティブFB条件とネガティブFB条件では，第1回から第4回まで，一貫してFBなし条件よりSSE-Aが高かっ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

た。また，ネガティブFB条件では測定につれて上昇がみられた。一方，GSE低群では，このようなFB条件間の変容傾向の有意な差はみられなかった。これより，GSEの高・低の影響はネガティブFB条件で顕著になり，また，FB条件の影響はGSE高群で顕著になるといえよう。

ただし，GSE低群におけるFB条件の効果については，各測定回ごとの，GSE×FB条件の単純交互作用の検定の結果，第3回の測定においてGSE×FB条件の単純交互作用が有意で（$F(2,264)=4.71, p<.01$），下位検定と多重比較の結果，ポジティブFB条件では，ネガティブFB条件やFBなし条件よりも有意にSSE-Aが高かった。また，各FB条件群の評定値自体をみると，全体的には，ネガティブFB条件とFBなし条件とがほぼ同程度であり，ポジティブFB条件がそれらよりもやや高くなる傾向が見られた。有意な差があったのは第3回の測定のみではあるが，ポジティブFB条件で他の2条件よりもSSE-Aが高くなる傾向がうかがわれる。

このように，SSE-T，SSE-Rには，先行研究(e.g., 深田, 1986)とほぼ同様の，FBの影響のみが見られたのに対し，SSE-Aには，ネガティブFB条件で，GSEの影響がみられた。SSE-AにのみGSEの影響がみられたのは，SSE評定の際に主に何を参照するかの違いによると考えられる。項目内容からして，評定の際に主に偏差値情報が参照されたと考えられるSSE-Rと，結果的にそれに連動していたSSE-Tでは，偏差値情報がその情報源として比較的大きなウエイトを占めており，GSEのような個人的特性が影響する余地は少なかったと思われる。一方，課題遂行量についてのFB情報に加えて，課題をやっての印象や手ごたえなど，主観的なものがSSE評定の際に主に参照されると考えられるSSE-Aには，GSEの影響がより顕著にみられたものと考えられる。また，ネガティブFB条件でのみGSEの影響がみられたのであるが，ネガティブFB条件では，偏差値情報は一貫してネガティブな情報であるのに対して，課題遂行量についてのFB情報は，試行を重ねるにつれて課題遂行量が上昇しているため，結果的にポジティブなものとなっている。このことが，課題遂行量の予測に基づく測度であるSSE-Aと，その他の測度との間の変容傾向の違いをもたらした可能性もある。さらに，自己効力感の高さの影響が，困難場面でより顕著になるとされているのと同様に，GSEの影響は，本実験でのネガティブFB条件のような，「かなり偏差値が低い」という脅威的なFBを受ける一種の困難場面で，顕著に現れたと考えられる。

3．課題遂行量への影響

最後に，SSE変容が課題遂行量に及ぼす影響について検討する。SSE変容が課題遂行量に影響を及ぼしていれば，SSE変容における群間差と対応した群間差が課題遂行量においても見受けられるであろう。そこで，SSEの分析と同様に，第2試行から第4試行の課題遂行量（TABLE 2の最下欄）について，FBの影響を受けていない第1試行の課題遂行量を共変量とする，GSE(2)×FB条件(3)×試行回(3)の3要因共分散分析を行った。分析の結果，試行回の主効果（$F(2,130)=42.26, p<.001$）のみが有意であった。後の試行の方が遂行量が多いことと群間差がないことから，この試行回の主効果は主に練習効果を示すと考えられる。

このように，課題遂行量においては有意な群間差はみられなかった。これについては，SSE変容が認知レベルにとどまるものであったため，行動にまで影響しなかった可能性も考えられるが，課題遂行時間が短か過ぎたために認知レベルでの変容が課題遂行量として顕在化する余地がなかった，という実験手続きの問題である可能性も残されている。この点について明らかにするためには，課題遂行時間を調整して，再度，SSE変容が課題遂行量に及ぼす影響を検討する必要があろう。

実　験　2

目的

実験1では，ネガティブFB条件において，GSE高群はGSE低群よりもSSE-Aが高いことが示された。このようなSSE-Aの変容は課題遂行量に影響を及ぼすと考えられるが，実験1では明瞭な結果が得られなかった。その原因が本質的なものか手続き上のものかを明らかにするため，実験2では，SSE-Aの変容傾向に違いが見られたネガティブFB条件において，SSE-Aの変容が課題遂行量に及ぼす影響を，課題遂行時間を延長して再度検討する。その際，実験への取り組み方を通じて課題遂行量に影響を及ぼすと考えられる以下の2点，すなわち，被験者が「課題遂行量は努力次第で変わる」と認知していなかった可能性，および，課題の重要性を低く認知していたために実験自体への関与が低くなっていた可能性，を排除するためのチェック項目を設けて検討する。

さらに，もし，SSEの変容に伴って課題遂行量のような行動レベルの変容が生じるなら，その前段階として，感情的な変化も生じているのではないかと考えら

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

れる。そこで，達成行動に関わる感情が，SSE変容に伴いどのように変容するか，また，課題遂行量の変容にどう影響するかについても検討する。

方法

被験者 実験1と同じ方法でGSE尺度を実施し，実験参加者を募った。実験への参加が得られた64名を，回答に不備の無かった全被調査者（375名）の尺度得点の平均値（71.10）に基づき，GSE高群（30名）と低群（34名）とに分けた。さらに各群をそれぞれ約2分の1ずつ，ネガティブFB条件とFBなし条件に割り当てた。その際，なるべく性別が偏らないように配慮した。この64名を対象に，後述の手続きによって実験を行ったが，このうち，14名は手続きに述べるような理由で除かれたので，最終的に分析可能なデータが得られたのは50名（男性20名，女性30名，年齢は19-23歳，平均年齢は20.7歳）であった。なお，この50名の中には実験1の参加者は含まれていない。

手続き FB条件をネガティブFB条件とFBなし条件の2条件にした点，課題遂行時間を2分間に延長した点，プレSSE測定の直後に，感情の測定と課題印象の測定を行った点，第4回のSSE測定の直後に，感情の測定を行った点（感情の測定は，プレSSE測定直後の測定をプレ測定，第4回のSSE測定直後の測定をポスト測定と呼ぶ）を除いて，実験1と同様の手続きを用いた。実験終了後には，被験者に真の実験目的とFBの操作について説明し，実験全般についての了承を得た。実験目的やFBの操作に気づいていた被験者，データに不備のあった被験者，課題印象の評定項目の評定値に，下記のような問題があった被験者，計14名は分析から除外した。

実験材料 課題遂行時間を延長したため，実験1と同様の方法で追加のパラグラフを作成し，実験1のパラグラフにそれを加えて用いた。

遂行成績のFBの操作（FB操作） ネガティブFB条件，FBなし条件の2条件を設定した。両条件とも，実験1と同じ方法を用いた。

自己評価の測定 実験1と同じ方法で行った。

SSEの測定 実験1で使用した3項目を，実験2の実験事態に整合するよう，一部書き換えて使用した。

感情の測定 測定項目は，深田（1986）を参考に，楽しさ（「どのくらい楽しいと感じますか」）・満足感（「問題のできにどのくらい満足していますか」）・やる気（「どのくらいやる気を感じますか」）の3項目について7段階で評定を求めた（楽しさであれば，「7.非常に楽しい」から「1.全然楽しくない」）。

課題印象の測定 努力について「この課題のできは努力しだいで変わると思いますか」との項目に「7.非常にそう思う」から「1.全然そう思わない」の7段階で評定を求めた。また課題の重要性について，「このような課題はあなたにとってどの程度重要だと思いますか」との項目に「7.非常に重要である」から「1.全然重要でない」の7段階で評定を求めた。努力についての項目で3以下に評定した被験者2名，重要性についての項目で2以下に評定した被験者7名は分析対象から除外した。この7名は上記の14名に含まれる。

結果と考察

1．FB操作がSSEの変容に与える影響におけるGSEの効果

群構成 50名の分析可能なデータから，GSE尺度得点が平均値付近の被験者を除外するため，各FB条件群よりGSE尺度得点の両極から10名ずつを抽出し，GSE(2)×FB条件(2)の4群を構成した（1群10名）。GSE高群のGSE尺度得点の平均値（標準偏差）はネガティブFB群，FBなし群の順に，81.7(5.4)，85.7(5.7)であり，GSE低群では同様に62.2(5.8)，58.9(5.6)であった。GSE尺度得点についてGSE(2)×FB条件(2)の分散分析を行った結果，GSEの主効果のみが有意で（$F(1, 36)=151.83$, $p<.001$），群構成はほぼ適切であったと考えられる。

FB操作の有効性の確認 FB操作の有効性を確認するために，自己評価の評定値について，FB条件(2)×測定回(4)の分散分析を行った。その結果，FBの主効果（$F(1,114)=28.38$, $p<.001$）が有意で，ネガティブFB条件（$M=3.86$）ではFBなし条件（$M=6.33$）よりも自己評価は低くなっていた。これよりFB操作は成功していたと考えられる。

FB操作がSSEの変容に与える影響におけるGSEの効果 SSE-T，SSE-R，SSE-Aのそれぞれのプレ測定値と第1回から第4回の評定値について，各群の平均値と標準偏差を求めた（TABLE 3）。

実験1と同様にSSE-T，SSE-R，SSE-Aそれぞれについてプレ測定値を共変量とするGSE(2)×FB条件(2)×測定回(4)の3要因共分散分析を行った。

(1) SSE-TとSSE-Rについての共分散分析では，いずれもFB条件の主効果のみが有意であった（SSE-T：$F(1,35)=18.42$, $p<.001$；SSE-R：$F(1,35)=36.79$, $p<.001$）。実験1の結果と比較すると，測定ごとにBF条件間の差が広まっていくことを示す，FB条件×測定回の交互作用が見られない点が異なっている。すなわち，実験2では第1回の測定から一貫してネガティブFB条件のほうが値が低くなっている。しかし，いずれにして

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3 条件群別，測定回別にみたSSE-T，SSE-R，SSE-A，課題遂行量の平均値（　）内は標準偏差，各群10名）（実験2）

		GSE高		GSE低	
		FBなし	ネガティブFB	FBなし	ネガティブFB
SSE-T	プレ測定	7.20(1.54)	7.00(1.34)	6.40(1.11)	5.90(1.45)
	第1回測定	7.50(0.92)	5.70(1.49)	6.00(1.18)	4.70(1.62)
	第2回測定	6.80(1.25)	5.40(0.92)	6.40(1.36)	4.30(1.85)
	第3回測定	7.20(1.17)	5.40(1.20)	6.30(1.27)	4.10(1.76)
	第4回測定	7.00(1.26)	5.20(1.66)	5.80(1.33)	4.00(2.00)
	第1～4回の平均	7.13(1.19)	5.43(1.36)	6.13(1.31)	4.28(1.83)
SSE-R	プレ測定	4.90(1.45)	5.70(1.10)	4.80(0.60)	3.80(0.98)
	第1回測定	5.60(1.11)	4.50(0.81)	5.10(0.70)	3.50(1.20)
	第2回測定	5.20(1.08)	4.30(1.01)	5.30(0.90)	3.50(1.20)
	第3回測定	5.50(1.36)	4.20(0.60)	5.20(0.75)	3.30(1.19)
	第4回測定	5.30(1.35)	4.20(0.75)	5.00(0.77)	3.20(1.08)
	第1～4回の平均	5.40(1.24)	4.30(0.81)	5.15(0.79)	3.38(1.18)
SSE-A	プレ測定	4.10(1.58)	3.50(1.28)	4.20(1.94)	3.40(1.50)
	第1回測定	4.50(1.63)	5.00(1.26)	5.10(1.45)	4.10(1.30)
	第2回測定	4.00(1.79)	5.40(1.20)	5.30(1.79)	4.70(0.64)
	第3回測定	4.40(1.56)	6.50(1.96)	5.40(1.86)	4.70(0.90)
	第4回測定	4.33(1.49)	7.00(1.61)	5.00(1.90)	5.20(0.98)
	第1～4回の平均	4.30(1.63)	5.98(1.74)	5.20(1.76)	4.68(1.06)
課題遂行量	第1試行	20.90(4.55)	19.40(2.62)	23.10(4.53)	19.70(3.44)
	第2試行	23.10(2.74)	21.30(2.87)	24.10(4.25)	19.10(2.59)
	第3試行	25.70(5.87)	26.60(3.69)	25.90(2.91)	22.20(4.69)
	第4試行	26.00(5.00)	26.70(3.77)	26.50(3.83)	23.50(3.32)
	第2～4試行の平均	24.93(4.90)	24.87(4.29)	25.50(3.84)	21.60(4.08)

注．SSE-Tの得点範囲：0点から10点，SSE-Rの得点範囲：1点から9点，SSE-Aの得点範囲：1点から12点

もFB条件の効果は，実験1の結果と大差ない。

(2) SSE-Aについての共分散分析の結果，FBの主効果（$F(1,35)=4.15, p<.05$），測定回の主効果（$F(3,105)=7.97, p<.001$），GSE×FB条件の交互作用（$F(1,35)=6.58, p<.05$），FB条件×測定回の交互作用（$F(3,105)=7.96, p<.001$）が有意であった。

GSE×FB条件の交互作用についての下位検定の結果，GSE高群においてFB条件の主効果が有意であり（$F(1,36)=11.05, p<.01$），ネガティブFB条件はFBなし条件よりも有意に高かった。また，ネガティブFB条件においてGSEの主効果が有意であり（$F(1,36)=4.79, p<.05$），高群は低群よりも有意に高かった。これらの結果は実験1と同様である。実験1でネガティブFB条件においてみられたGSE高群と低群の間の変容傾向の違い（GSE高群では上昇傾向がみられ，低群では低いまま変化が見られない）は有意ではなかったが，ネガティブFB条件においてGSEの高群は低群よりSSE-Aの値が高くなることは再度確認された。

2．課題遂行量への影響

各群の課題遂行量の平均値と標準偏差をTABLE 3の最下欄に示す。実験1と同様に，第2試行から第4試行の課題遂行量について，第1試行の課題遂行量を共変量とする，GSE(2)×FB条件(2)×試行回(3)の3要因共分散分析を行った。共分散分析の結果，GSEの主効果（$F(1,35)=10.92, p<.01$），試行回の主効果（$F(2,70)=40.24, p<.001$），FB条件×試行回の交互作用（$F(2,70)=5.48, p<.01$）が有意であった。すなわち，GSE高群の方が低群よりも課題遂行量が多い。また，FB条件×試行の交互作用の下位検定の結果，試行回の主効果は両FB条件群において有意であり（ネガティブFB条件：$F(2,72)=39.51, p<.001$；FBなし条件：$F(2,72)=8.02, p<.001$），両群とも実験1と同様に，試行を重ねるにつれ課題遂行量は上昇していた。FB条件の主効果は第2試行で有意で（$F(1,108)=5.17, p<.05$），ネガティブFB条件群の遂行量はFBなし条件群よりも少なかった。このFB条件の主効果は，SSE-T，SSE-Rの変容傾向と対応しており，第2試行の課題遂行量にSSE-TやSSE-Rの影響が及ぼされたことを示しているといえよう。

さらに，有意水準には達していなかったが，GSE×FB条件の交互作用傾向（$F(1,35)=2.96, p<.10$）がみられていたので，これについても下位検定を行ったところ，ネガティブFB条件で，高群の方が低群よりも課題遂行量が多くなる傾向がみられた。この差の傾向は，SSE-Aにおける群間差に対応している。すなわち，ネガティブFB条件において，GSE高群の方が低群よりもSSE-Aが有意に高い（SSE-TとSSE-Rには有意な群間差はない）。このことは，SSE-Aの変容が課題遂行量に影響を及ぼしている可能性を示すものといえよう。

SSE-T，SSE-R，SSE-Aの3つのSSEの測度の変容傾向と課題遂行量の変容傾向との対応から，SSE-TとSSE-Rについては，第2試行，つまり，第1回目のFB操作の後に，一時的な課題遂行量への影響が推測されるのに対し，SSE-Aについては，試行を通じて，課題遂行量に影響を与えていたと考えられる。

3．感情との関連

達成行動に関わる感情がSSE変容や課題遂行量の変容に，どのように関連するかを検討するため，各感情評定項目のプレ評定値について以下の分析を行った。まず，GSEと各感情との間の関連を検討するために，GSE尺度得点と各感情評定項目のプレ評定値とのピアソンの相関係数を算出した（$N=50$）。その結果，GSE尺度得点と満足感の間に有意な相関係数がみられ（$r=.42, p<.01$），GSEの高い者の方が満足感が高くなる傾向があった。また，GSE群間での各項目のプレ評定値の平均値の差の検定では，GSE高群（$M=4.60, n=20$）の方が低群（$M=3.00, n=20$）よりも満足感が高かった（$t=$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

5.14, $df=38$, $p<.001$)。楽しさ，やる気については，それらとGSE尺度得点との間には，有意な関連は見出されなかった。

次にSSEの変容に伴う感情の変容について検討するため，各項目のポスト評定値について，プレ評定値を共変量とする，GSE(2)×FB条件(2)の2要因共分散分析を行った。その結果，満足感においてFB条件の主効果が有意であり($F(1,35)=4.12$, $p\leqq.05$)，ポスト評定値において，ネガティブFB群の方がFBなし群より満足感が低く，満足感の低下がFBなし群より大きいことが示された。ネガティブFB群とFBなし群の共変量による調整済み平均値はそれぞれ，2.93，3.62であった。GSEの主効果，および交互作用は有意でなかった。また，楽しさ，やる気については有意な効果はなかった。

総合考察

本研究では，個人的特性であるGSEが，SSEの変容に及ぼす影響を検討することを主目的としていた。そして，SSEの変容過程でのGSEの影響を検討するために自我関与的FBを用い，FBの操作の影響がGSEの高・低により異なるかどうか，との観点から検討を行った。その結果，SSEの3種類の指標のうちの1つであるSSE-Aにおいて，ネガティブFB条件下でGSEの高・低群間で違いがみられ，GSE高群では上昇傾向が見られたのに対し，低群では低いまま，ほとんど変容は見られなかった。すなわち，GSEの影響は，評定に際して偏差値についてのFB情報が参照されやすいSSE-RやSSE-Tと比較して，課題遂行量についてのFB情報や主観的な印象が参照されやすいと考えられるSSE-Aにおいて，また，ネガティブFBを受けるといった，一種の困難場面で示された。このことは，GSEがSSEの変容過程において影響力を持つことを示すと同時に，その影響力は状況によって異なり，限定された状況下で顕著に現れることを意味している。

さらに，SSE-Aの変容が課題遂行量に与える影響については，実験2で，課題遂行量にSSE-Aの変容傾向に対応した群間差の傾向が見受けられたことから，その可能性が示唆された。そして，このような課題遂行量の変容には，満足感の低さ(低下)がSSEを媒介して影響していることが推測される。すなわち，不満感が動機づけとなるか否かの規定因の1つに自己効力感があり，自己効力感が高ければある程度の不満は動機づけにつながるとの指摘（Bandura, 1982 / 1985）をふまえて次のように解釈される。SSE-Aの高いGSE高群では，ネガティブFB条件での満足感の低下が動機づけとなって，努力量を通じて課題遂行量を増加させたのに対し，GSE低群は，満足感は低いもののSSE-Aも低いために満足感の低さが動機づけ要因となりにくく，課題遂行量の増加も少なかったのではないか。

このような本研究の結果は，SSEを向上させるための介入を行うにあたり，GSEの高・低をも考慮する必要性があることを示している。すなわち，GSEの高い者は，ネガティブな意味をもつFB情報が与えられても，その後のSSE，特にTaylor(1989)のいうpersonal self-efficacyにあたるような部分や課題の遂行量が抑制される可能性は，GSEの低い者よりも少ないと考えられる。また，GSEの高い者の場合には，たとえネガティブな意味をもつFB情報であっても，FB情報が存在する場合のほうが，FB情報が与えられない場合よりも，不満感などの感情反応がバネとなり，課題の遂行量は上昇する場合があると考えられるのである。

引用文献

Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191—215.

バンデューラ A. 1982/1985 重久 剛(訳) 1985 自己効力(セルフ・エフィカシー)の探究 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木 豊(編) 社会的学習理論の新展開 金子書房 Pp.103— 141.

Bandura, A. (Ed.) 1995 *Self-efficacy in changing societies*. Cambridge, New York : Cambridge University Press.

Bandura, A., & Jourden, F. J. 1991 Self-regulatory mechanisms governing the impact of social comparison on complex decision making. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 941—951.

Bandura, A., Reese, L., & Adams, N.E. 1982 Microanalysis of action and fear arousal as a function of differential levels of perceived self-efficacy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 5—21.

カーソン R. 上遠恵子(訳) 1987 海辺—生命のふるさと— 平河出版社
(Carson, R. 1955 *The edge of the sea*. Boston : Houghton Mifflin Company.)

深田省三 1986 自我関与的フィードバックが自己効力感と遂行に及ぼす影響 日本心理学会第49回

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

発表論文集, 606—607.
中澤 潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知理論へ—Bandura 理論の新展開をめぐる最近の動向— 心理学評論, **31**, 229—251.
成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達利用の可能性を探る— 教育心理学研究, **43**, 306—251.
Nicholls. J.G. 1984 Achievement motivation : Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, **91**, 328—346.
坂野雄二 1989 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, **2**, 91—98.
坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, **12**, 73—82.
坂野雄二・東條光彦 1993 セルフ・エフィカシー尺度 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp.478—489.
Schunk, D.H. 1983 Developing children's self-efficacy and skills : The roles of social comparative information and goal setting. *Contemporary Educational Psychology*, 8, 76—86.
Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. 1982 The Self-efficacy Scale : Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663—671.
Tannenbaum, S. I., Mathieu, J.E., Salas, E., & Cannon-Bowers, J. A. 1991 Meeting trainees' expectations : The influence of training fulfillment on the development of commitment, self-efficacy, and, motivation. *Journal of Applied Psychology*, **76**, 759—769.
Taylor, J. 1989 The effects of personal and competitive self-efficacy and differential outcome feedback on subsequent self-efficacy and performance. *Cognitive Therapy and Research*, **13**, 67—79.
Watt, S. E., & Martin, P. R. 1994 Effect of general self-efficacy expectancies on attributions. *Psychological Reports*, **75**, 951—961.

謝 辞

本論文をまとめるにあたりご指導下さいました，広島大学教授 松田文子先生，今泉信人先生，同助教授 湯澤正通先生に深く感謝いたします。また，本実験の実施にご協力下さった学生のみなさんに心からお礼申し上げます。

(1998.6.2 受稿, '99.8.23 受理)

Relation of Generalized Self-Efficacy to Changes in Task-Specific Self-Efficacy

Motoko Miyake (Department of Psychology, Hiroshima University) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2000, 48, 42—51*

The present study examined effects of generalized self-efficacy (GSE) on changes in task-specific self-efficacy (SSE). In Experiment 1, 72 undergraduates were divided into high and low groups based on their scores on generalized self-efficacy. Subjects in each group were assigned to one of 3 conditions : Positive Feedback (FB), Negative Feedback, or No Feedback (control). Subjects in the 2 feedback groups received false feedback information, positive or negative respectively, about their task performance. Task-specific self-efficacy based on the expected work amount was higher in the high group than in the low group under Negative Feedback, whereas no differences were found between the high and low groups under either Positive or No Feedback. In Experiment 2, 40 undergraduates, divided into high and low groups as in Experiment 1, were assigned to either Negative Feedback or No Feedback (control) conditions. Again, the task-specific self-efficacy of the high group was higher than that of the low group under Negative Feedback. Furthermore, task performance in Experiment 2 changed in nearly the same way as in Experiment 1. These findings suggest that generalized self-efficacy may influence task performance through changes in task-specific self-efficacy.

Key Words : generalized self-efficacy, task-specific self-efficacy, feedback, undergraduates

NII-Electronic Library Service